郷土のよさに気付き、生活をよりよくしようと主体的に実践する児童の育成

―第５学年「はじめてみようソーイング」の実践を通して－

今治・越智支部

１　研究の視点

(1)　興味・関心を高め、主体的な学習を促すための指導の工夫

(2)　地域素材を生かした題材構成の工夫

２　実践事例

(1)　題材名　はじめてみようソーイング　～　大好き！今治　今治産タオルで作ろう　～

(2)　目標

○　手縫いや製作に関心をもち、なみ縫い、返し縫い、かがり縫いなどやボタンつけ、縫い取りができる。

○　製作に必要な用具の安全な使い方が分かり、生活に役立てることができるように目的に応じた縫い方を考えたり、自分なりに工夫したりして小物の製作ができる。

(3)　題材設定の理由

○　本学級の児童（男子 14 名、女子 13 名、計 27 名）は、第５学年から始まった家庭科の学習への興味・関心が高く、家庭科の授業を楽しみにしている児童が多い。これまでの「わたしと家族の生活」や「はじめてみようクッキング」の題材でも、その意欲を大切にしながら学習を進めてきた。「はじめてみようソーイング」は、裁縫箱を手にして最初の製作の題材で、児童の希望や期待も大きいと考える。

　しかし、これまでに実際に手縫いをした経験のある児童は５人と、大変少ない。針と糸を用いて行う手縫いの学習には、不安や苦手意識をもっている児童もいる。このように、手縫いの技能面での習得は、個人差が大きいと考えられる。

○　本題材は、手縫いの基礎的な技能を身に付け、生活に役立つ物を製作して活用することをねらいとしている。日常生活の中では、既製の衣服を身に付けていたり、袋物を購入したりすることが多く、針と糸を用いる必要性が薄れてきている。

　しかし、中には体操帽子のゴムにゆるみが生じたときや給食着のボタンが外れたときに、針と糸で縫わなければならない必然性に迫られた児童もいるのではないだろうか。そこで、手縫いの基本的な技能を身に付け、楽しく小物づくりをすることを通して、自分で衣服の手入れができる喜びや、物を作り上げていく達成感を味わうことができるようにしたいと考えた。

○　指導に当たっては、初めて針と糸を用いて行う手縫いの学習に不安や苦手意識をもっている児童もいるため、興味・関心が高まるように全体の見通しや個に応じた目標を常にもたせながら授業を進めていくことにする。その際、題材を通して児童の意識がどのように変化していくのかを図式化し、把握しながら見通しをもって指導していくようにしたい。

　「楽しい小物づくり」では、基礎縫いの学習を振り返ることで、自らの課題を見付け、「もっとこうしたい」「次はこれもしてみたい」という思いをもちながら主体的に活動できるようにしていきたい。今回は地域の協力を得て今治産のタオル地を活用することにした。総合的な学習の時間での環境学習を生かし、地元産の素材を活用した小物づくりの題材を設定することで更に製作意欲を高めていきたい。

　また、製作過程を通して、「今治産のタオルへの愛着」「地元産への誇り」など郷土のよさに気付き、「大好き!今治」という思いが高まるようにしたい。本時は、立花地域ぐるみで応援をしているＦＣ今治の選手を招き､児童とともに「楽しい小物づくり（今治産オーガニックタオルを活用したランチョンマット)」を行うことにした。地域の協力を得て、今治産のオーガニックタオルやＦＣ今治のエンブレムをいただき、それを活用していく。児童は、選手と交流し大好きな選手と製作することで意欲を高め、自分の見付けた製作課題が達成できるように創意工夫しながらランチョンマットの製作を行っていく。

　さらに、技能の習得が早い児童は名前の縫い取りをしたり、楽しく飾りを付けたりと創意工夫し、個に応じた主体的な製作ができるように働きかけていきたい。そして、完成後は給食時に全員で実際にランチョンマットを活用していくことを目標にしたい。

(4)　指導と評価の計画(全８時間)

次	時間	学習活動	評価規準・評価方法			
			関心・意欲・態度	創意工夫	技能	知識・理解
1	4	**針と糸にチャレンジ** 玉結び・玉どめを練習する。 ボタンを付ける。 縫い取りをする。	布を用いた小物の製作に関心をもっている。 （観察）		ボタンつけができる。 名前などの縫い取りができる。 （作品・観察） 製作に必要な用具の安全な取り扱い方ができる。 （作品・観察）	ボタンつけの仕方を理解している。 （作品・観察）
2	4 本時その3・4	**楽しい小物づくり** なみ縫いなど基礎縫いを練習する。 形や飾りなどの計画を立てる。 ランチョンマットを製作する。	手縫いや製作に関心をもち、目的に応じた縫い方で製作し、その楽しさや活用する喜びを味わっている。 （作品・観察・チェック表・ワークシート）	ランチョンマットの縫い方について考えたり、飾りなどを工夫したりしている。 （作品・観察）	なみ縫い、返し縫い、かがり縫いなどができる。 （作品・観察） 目的に応じた縫い方で製作することができる。 （作品・観察）	なみ縫い、返し縫い、かがり縫いの仕方について理解している。 （作品・観察） 製作に必要な用具の安全な取り扱い方について理解している。 （観察）

(5)　本時の指導（７・８/８）

ア　ねらい

製作に必要な用具を安全に扱い、工夫してランチョンマットの製作をすることができる。

イ　準備

オーガニックタオル、実物見本、段階見本、製作計画カード、振り返りカード

ウ　展開

学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点（○）と評価規準（◎【評価方法】
1　学習課題を確認する。	自分のめあてをもって、ＦＣ今治の選手といっしょにランチョンマットを工夫して製作しよう。	○　ＦＣ今治の選手を紹介する。 ○　製作計画カードで自分のめあてを確認させる。
2　用具を準備し、計画カードで自分のめあて、製作手順、縫い方などについて確認する。	○　用具を準備して製作計画カードで自分のめあてや製作手順、縫い方などを確認しましょう。 ・　私は細かくなみ縫いをしていくことを目標にしているよ。 ・　まち針が８本とも揃っていることを確認したよ。	○　用具の準備の際は、針の本数チェックカードに記入しているか等確認する。 ○　ＦＣ今治の選手と交流できるように事前にグループ分けしておく。
3　なみ縫いやかがり縫いなど自分の決めた縫い方で、タオルの周りを縫う。	○　自分の計画した通りにランチョンマットを製作していきましょう。周りが縫えた人は、飾りの縫い取りもしていきましょう。	○　本時の素材である今治産のオーガニックタオルについて、総合の時間に学習したことを想起させる。

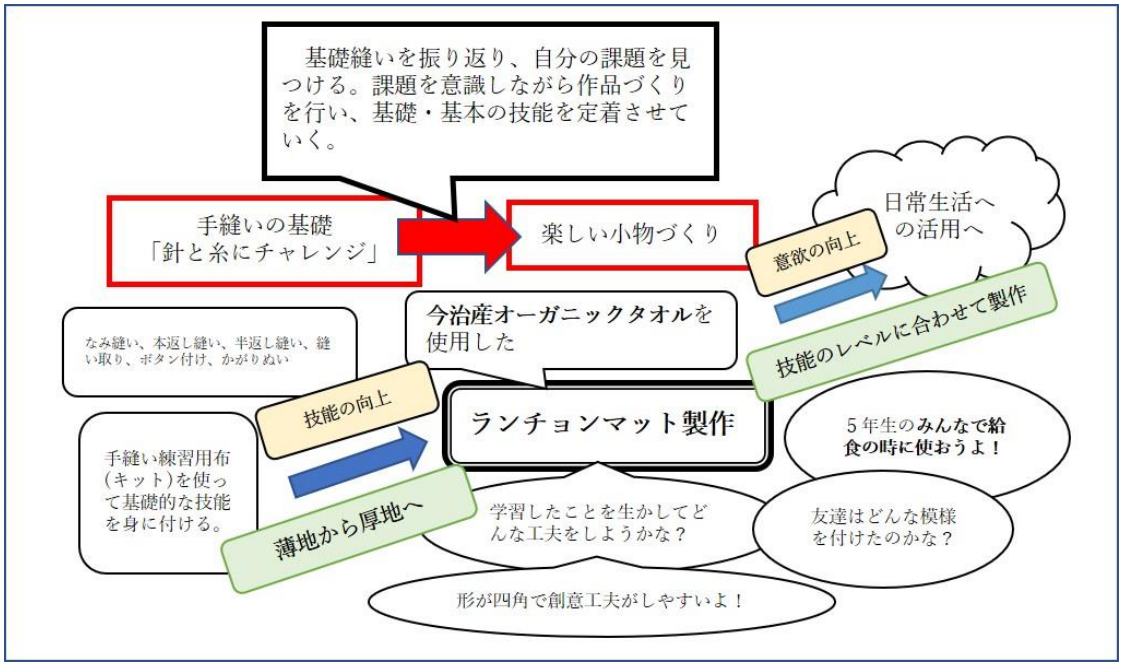
（ランチョンマットの製作をする。）	・　かがり縫いが苦手なので、上手に縫えるようにがんばっているよ。 ・　ＦＣ今治の選手を応援する言葉の縫い取りをするよ。 ・　赤糸で花の飾りを縫い付けてかわいらしくしているよ。	○　互いに縫い方を確かめながら作業できるように机をグループ別にする。 ◎ 製作に必要な用具を安全に扱い、基礎縫いが正しくできているか。 【観察・作品】
4　友達やＦＣ今治の選手といっしょに作品を見ながら、よいところを伝え合う。	○　出来上がったランチョンマットをお互いに見て、感想を伝え合いましょう。 ・　なみ縫いの縫い目がそろっていてきれいに縫えているね。 ・　ＦＣ今治の選手にも褒めてもらったよ。	○　相互に作品を見せ合ったり、感想を交流し合ったりさせることで、対話的な学びにつなげる。 ◎ 飾りの縫い取りなどを工夫してランチョンマットを製作しているか。 【チェック表･ワークシート･作品】
5　本時の振り返りをする。	○　自分のめあてを頭に入れながら製作できたか今日の活動を振り返ってみましょう。 ・　オーガニックタオルの肌触りがいいので、気持ちよく縫えたよ。 ・　ネームを付けるときは細かい縫い目にして、うまくできたよ。	○　めあてをもって製作できたかなど児童の感想をしっかり引き出し、製作の達成感をもたせるようにする。

(6)　活動の実際

ア　興味・関心を高め、主体的な学習を促すための指導の工夫

(ｱ)　児童が見通しをもち、主体的に製作するための指導について

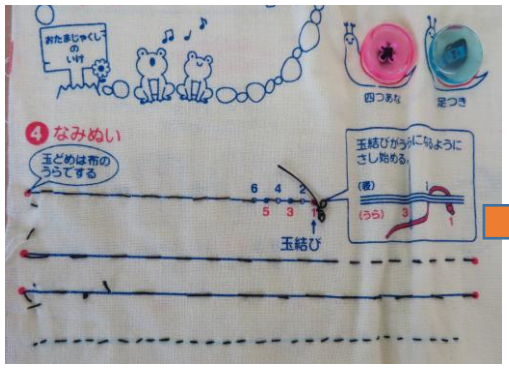
本題材の指導に当たっては、手縫いの基礎・基本の技能の定着を図りながら作品を製作していくために、見通しをもつことが大切だと考え、題材全体の活動の流れ（児童の思考）を図にして、児童へ提示しながら学習を進めた（資料１）。また、総合的な学習の時間と関連させ、不用になった今治産のタオル地を活用したランチョンマットの製作を設定し、給食時に活用するという見通しをもった学習へとつなげていった。ランチョンマットであれば、それぞれの技能のレベルに合わせることもできると考えた。



〈資料１　題材全体の活動の流れ〉

(ｲ)　自らの課題を見付け、主体的に製作するための指導の工夫

手縫いの技能面での習得は個人差が大きいのが課題である。そこで、基礎縫い練習（手縫いキットを活用）の段階で一人一人が自らの課題を見付け、技能が向上するよう意識しながら小物づくりに取り組むようにした（資料１）。また、製作計画カードに毎回、自分の課題を記入させることにより、よりよい作品に仕上がるように気持ちを高めていった。



基礎縫いで見付けた自分の課題

○　自分が正確に縫うことができていない縫い方や自信のない縫い方に挑戦するよ。

○　縫い目や縫い幅のばらつきを直したいな。

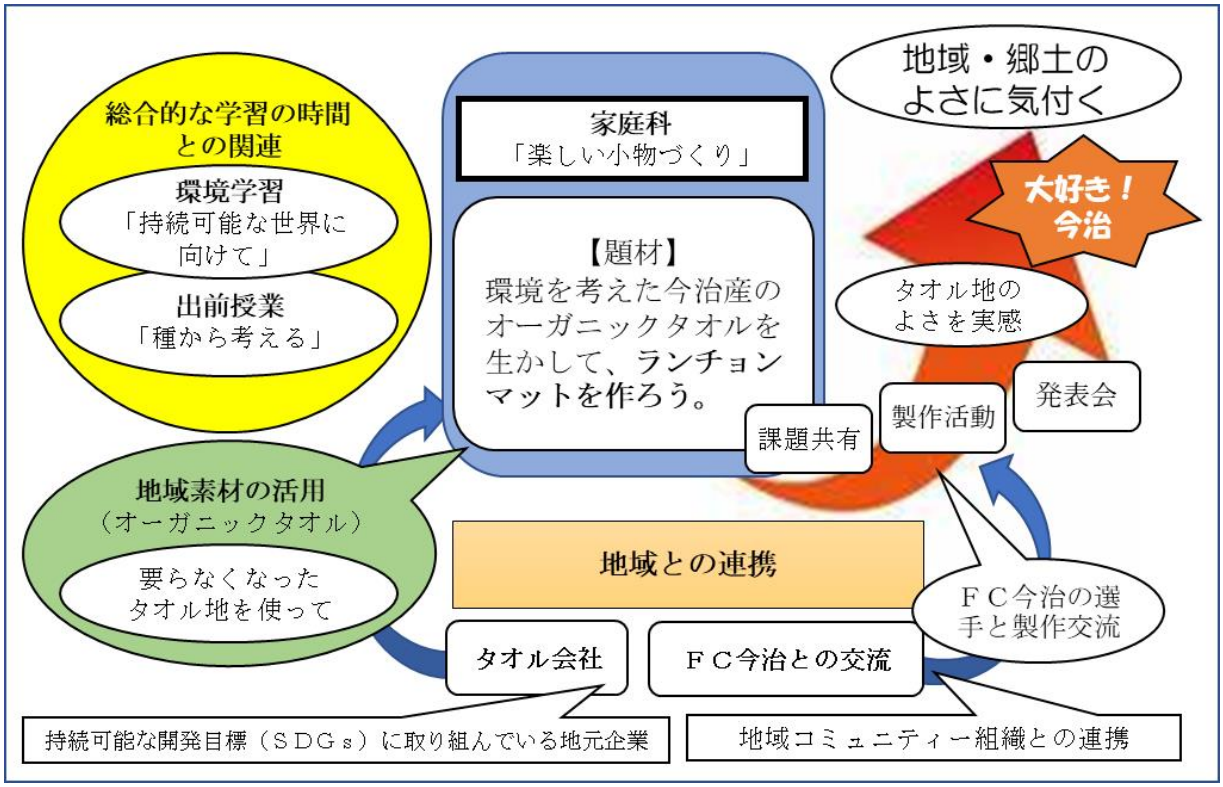
○　糸端がほどけないように、玉どめにゆるみがないようにきちんとしたいな。

○　大きな縫い目だったので、細かななみ縫いで縫っていきたいな。

〈資料１　一人一人の「もっとこうしたい」という思いや願いを高めるための支援〉

イ　地域素材を生かした題材づくり

「楽しい小物づくり」においては、今治のタオル会社やＦＣ今治との関連を図り、資料２のように題材を構成した。



〈資料２　他教科と関連させた題材構成〉

(ｱ)　地域素材（今治産オーガニックタオル）の活用

総合的な学習の時間（環境学習「持続可能な世界に向けて」）において、今治市のタオル会社

（IKEUCHI ORGANIC 株式会社）の代表の方から「種から考える」と題した出前授業をしていただいた（写真１）。児童は、地元のタオル会社でも持続可能な社会に向けて「ＳＤＧｓ」に取り組んでいること（資料３）や環境のことを考えて作られたオーガニックタオルのことを知り、大変興味深く学習した（資料４）。そこで、製造過程で生じる要らなくなったタオル地をいただけることなり、家庭科学習「楽しい小物づくり」で活用することにした。

〈写真１　親子で出前授業を受ける様子〉

〈資料３　地元企業のＳＤＧｓの取組〉

〈資料４　学習後の児童の感想〉

○　農薬を使わない綿を作り、そして今治まで届き、今治で加工され、いいタオルを世界に広めていることが分かりました。自分が住んでいる地域が作ったものが世界に出ていると考えるととても誇らしいです。

○　綿は虫に弱いから農薬をたくさん使うけど、オーガニックタオルは農薬を使わないことや体育館ほどのたくさんの綿から５～６枚しかタオルが作れないこと、オーガニックは地球温暖化が進まないように環境にやさしいタオル作りをしていることが分かりました。

(ｲ)　ＦＣ今治との交流

ＦＣ今治は、社会貢献活動として市内の小学校でサッカー教室を実施しており、これまでも児童と交流を深めてきた。一方、本校のある立花地域は、独自に観戦ツアーを実施するなど、地域を挙げて応援しており、学校を核として地域とＦＣ今治の連携を深める新しい取組を模索していた。

そこで、今年度は、５年生の家庭科の時間に来ていただき、いっしょに楽しみながらランチョンマットを製作することにした（写真２）。また、ＦＣ今治のエンブレム（写真３）を付けたオリジナルのランチョンマットを仕上げ、児童の気持ちも高まっていた。

〈写真２　選手といっしょに製作している様子〉

〈写真３　ＦＣ今治のエンブレム〉

児童は、自分の課題に応じて、めあてをもって製作しており、次々と楽しみながら作品を仕上げていった。名前や言葉を縫い取りしたり飾りを入れたりと時間いっぱい製作していた。仕上がった後はＦＣ今治の選手にサインをしてもらう児童もいた（写真４）。

ランチョンマット製作は、学年全体で取り組み、完成したものを給食時にみんなで使用した（写真５）。みんなで使用することにより、製作した喜びも増したようであった。また、机に並んだランチョンマットを見ながら、一人一人の作品のよいところを伝え合う場面も見られた。

〈写真４　完成したランチョンマット〉

〈写真５　手作りのランチョンマットで給食〉

３　成果と課題

初めて針と糸を用いて行う手縫いの学習には不安や苦手意識をもっている児童もいるため、少しでも興味・関心が高まるようにと考え題材や指導を工夫したことにより、主体的に製作に取り組み、達成感・充実感を味わうことができていた。多少の個人差はあるものの手縫いの基礎は身に付いたのではないかと思う。見通しや目標を常にもたせて製作していくことの大切さを実感した。

また、持続可能な社会の構築、地元企業の「ものづくり」の視点からは、タオル会社と連携して、よりよい生活づくりの具現化を図る取組ができたのはよかったと思う。しかし、今回使用したオーガニックタオルは厚地であるため、縫う際に苦労している場面も見られた。技能を確実に習得させるには、個に応じて厚さや種類の違う布地を選べるようにするなど、段階的に技能が身に付くように配慮すると、もっと一人一人が自信をもって製作できたと感じた。

今回は、手縫いによる小物づくりでの実践であった。２学期に実施する題材「わくわくミシン」でも、地域素材「オーガニックタオル」を活用した作品づくりを実践した。そうすることで、学習に関連をもたせ、学びを継続させることができた（写真６）。

〈写真６　地域素材で製作したエプロン〉

また、児童は、余ったタオルを見ながら、「次に何を作ろうかな」「タオルをつなげて大きなエプロンはできるかな」「家でもやってみたい」など、地域の身近な素材であるタオルを使って、生活に役立つものを作ってみたいという創作意欲を次々とわかせていた。引き続き、地域素材を活用した題材を設定し、製作意欲を高めていきたい。

また、地域素材を題材にした製作活動を通して、郷土のよさを再認識し、地元への愛着や地元産への誇りなど、「大好き！今治」という思いを高めることができた。今後も一層、児童が郷土のよさを味わうことができるように、地域の企業や人材の協力を得ながら「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて取り組んでいきたい。